

『それぞれの人生』

ひじり在宅クリニック 院長 岡本 拓也



その日は3人の方のお看取りがあった。皆さん、90代の女性。お一人は、医師である夫と共に同じ施設の隣り合った部屋に住まわれていた方。父親と同じ職業を選んで関東の方で父親と同じ診療科の医師として働いている一人息子が、最後は父親のそばに居させてあげたいと希望し、入院先の病院から退院して夫がいる施設に戻って12日目の深夜に亡くなられた。100歳になる夫は、深夜、施設のスタッフに手伝ってもらって自分の部屋のベッドから起こされ、手を引いてもらいながら、おぼつかない足取りで妻の部屋に入ってきた。まだほんのり温かい妻の亡骸の横で、施設のスタッフに支えられながら、かつては立ち尽くす遺族に向かってご自分が逆の立場でしておられたであろう後輩医師の臨終の言葉を、傾きながら黙って聴いておられた。もともと小柄なお身体は、更に小さくなられて、妻の死亡診断書に目を落としておられた。「先生、ではまたお目にかかりましょうね。息子さんが今日こちらに来られると思いますから、今日はもうお休みください」と深々とお辞儀をして、その場を辞した。

二人目は、終末期の癌で最期を迎えた方。4ヶ月ほど前に、「お腹が痛い」ということで病院を受診し、色々と調べた結果、肺臓に進行した癌が見つかったけれど、年齢を考えると積極的な治療はできるわけもなく、簡単な点滴をしてもらいながら、本人の意に沿わない入院生活を余儀なくされていた。とても団結力のある家族で、近くに住む子供たちの家族や孫、ひ孫がしつちゅう勢揃いしては賑やかに過ごすようで、患者さんは、そんな昔ながらの大家族の最長老で、一族みんなから愛されているグレートマザー的な存在だった。自宅に退院されるや、いつもそうしていたように愛猫が患者さんの胸の上に飛び乗って来て安心したように寝転がった。患者さんも安堵した嬉しそうな顔で暫くいたが、「重い」と言って愛猫を払い除けた。愛猫は仕方なく患者さんの足元に移動し、そこで丸くなった。家で過ごした25日間に、その間の介護を主に担った同居の長女さんの誕生日があったので、いつもそうして来たように一族が集結し、食べ、飲み、歌い、話し、泣き、笑い、祝い合った。ベッド上の患者さんも、一族が奏でるひどく賑やかな心地よい騒音に包まれて、一族のグレートマザーとして至福の時を過ごした。彼女は一族の長としてたいへん愛情深い方で、訪問看護師の方をちらと見やって、「何か食べるものを出してやって」と長女に言うのだった。看

取りに呼ばれた最後の日、ひ孫ちゃんたちは、グレートマザーに最後に渡す手紙を書いていたところだった。人生最後の日の午前中の動画も見せてくれたが、意識はしっかりとあってそれなりの会話もでき、家族や愛猫と交流し、最後の最後まで温かい愛に囲まれて過ごされる姿がそこにはしっかりと写されていた。「最高の選択ができて良かったです」という娘たちの声を後にして玄関を出た時には、日が短い季節柄、すっかり日は暮れていた。

三人目の方は、一番長く関わってきた方で、僕が訪問診療を始めた当初から診てきた人だった。僕が今の仕事を始める以前から、そのケアハウスに入居しておられた。夫は早くに癌で先立ち、一人娘は遠く本州で暮らしていた。ケアハウスに入るきっかけは、恐ろしい出来事に遭遇したことだった。一人暮らしの家に強盗が押し入り、手足を縛られ怪我を負わされた。当然のことながらその経験はトラウマとなり、時にフラッシュバックしては彼女を苦しめた。なかなかお迎えに来てくれない、もう向こうに行きたいんだけどね、といつも話されていた。妹は僕のクリニックの近所に住んでいる方で僕の外来にも長くかかっていて、バスに乗って姉の見舞いにしばしば行かれていた。その妹も数年前に自宅での一人暮らしが難しくなり、姉とは違う別の施設に入居し、僕の手を離れた。が、施設に入って間もなく、自分の部屋で亡くなっているのを施設のスタッフに発見された。妹の死を知ってからは尚更、もう自分も逝きたいよ、と言うようになったが、それからも数年間、生き続けた。何度も状態が悪くなったり、強い生命力を持ち直し、少しの治療で奇跡の生還を果たしては、また逝けなかつた、なかなか思い通りにはならないね、と苦笑いするのだった。強盗事件のトラウマに度々苦しめられたけれど、元々の性格は明るく、素敵な笑顔の方だった。願い続けた旅立ちを果たした亡骸に向かって最初に僕の口から漏れ出た言葉は、「ようやく逝けましたね…お疲れさまでした」というものだった。

誰しもいつかは最後の時が来る。自分の最後には、どんな光景が広がっているのだろうか。